

松林詔八君のお通夜にお参り下さいました皆様に、葬儀委員長としてご遺族に代わりまして御礼のご挨拶をさせていただきます。

今夕は、何かとご多用のところ、松林君のために御焼香下さり、かつ又、心からなる御供花御供物御香料など賜りまして誠にありがとうございました。

松林君は、私にとってかけがえのない生涯の友であり、四十年にわたって公私共に言葉に言い尽くせない程の御厚情をいただいて参りました。

このたび、奥様のスミ子様が、松林君の書き残した遺言の中で「葬儀委員長は横路に」と記されてあったとお話下さいました。病床にあってもいつも明るく冗談を言いあっていましたので、彼がいつ、どんな思いでそんなことを考えたのかと胸つづれる気持ちがいたします。

お参りにいただいた皆さまは御承知と思いますが、彼は今から十一年前の一九九四年五月にガンの手術を受けました。食道と胃をとる大手術でしたが、元気に復帰致しました。その後三年たつて九七年の八月、再び大腸ガンの手術を受け、これも元気で社会に復帰、もう問題ないと皆が考えていたのですが、七年後の昨年十一月喉頭ガンを発症、入院して抗ガン剤などの治療を受けて一月に退院致しました。私は、このように何度も不死鳥の如くよみがえってきた松林のことだから、今度も大丈夫と祈りをこめて見守っておりました。

亡くなる一週間前にお見舞いした時には、タンを処理するために喉に穴をあけていたので筆談をかわしました。顔色もよく、本人も三日もしたらこの穴を閉じて話ができるというので、当然又、会って話ができると思って「またな」と握手をして病室を出ました。それが、私の松林との最後になりました。

その後五日程安定した日が続き、喉もふさいで声も出るようになった矢先、突然、多量の吐血。痛みもひどくなり、輸血や鎮痛剤の投与、医師団も懸命な努力をして下さいました。奥様、お兄様達、甥御さん姪御さん達みなさまに囲まれて、六月二十四日午後十一時二十分、ついに黄泉の国へ旅立ちました。誠に誠に痛恨の極みであります。

特にこの間、十一年以上にわたる彼の闘病生活を支えてこられた奥様スミ子様のご苦勞と献身、松林君を慈しみ、ささえてこられた御兄姉のみなさまに、衷心よりお悔やみ申し上げます。

ここで慣例により松林詔八君の経歴を簡単ではありますが御紹介させていただきます。

松林詔八君は、昭和十七年一月八日、父松林幸次郎さん母カノイさんの十一人兄姉の末っ子として長野県で生まれました。御両親、七人のお姉さん達、三人のお兄さん達の愛情を一身に受けて育ちました。昭和三十五年三月、長野県立長野高等学校、三十九年三月、中央大学法学部法律学科を卒業され、四十年十月、司法試験に合格されました。二年間の司法修習を経て、昭和四三年四月、東京弁護士会で弁護士登録、風間かざま克貫法律事務所こくかんで仕事を始めました。昭和四八年に独立。赤坂に事務所を構え、昭

和五十年、今の三宅坂ビルに移り現在に至っています。

法律家としては、民事刑事を問わず幅広いジャンルでらつ腕をふるってきました。ある雑誌の紹介に、「僕はおかしい人間だからと口ではおっしゃるがどうしてどうして。その新鮮にして柔軟な発想は定評のあるところ。最新の小説は欠かさず読破。三六五日欠かさず飲み、週末に麻雀の誘いあらば馳せ参じ、出身地の戸隠で同窓会あらば飛んでいき、『本当は法廷サボって遊び暮らしたい』と公言するも仕事はいたって誠実。ダンディズムの人なのだ。」と書かれたことがありました。まさにその通り、ゴルフの腕も一級、そして人々への気配りも一級、冗談を言って人々を笑わせキャディーさん達の人気者でもありました。

私の個人的な関係の始まりは、四十年前の司法修習の時でありました。彼は私より一年早く司法試験に合格していましたが、口述試験で試験官と口論になり、一年遅れで、私と同じ二〇期になりました。クラスは隣のクラスでしたが、東京修習で一緒になり、麻雀を教わったり、研修所に出される宿題を何人かで考えあう仲となりました。研修所二年目の夏、松林と一緒に長野の善光寺に行き、その年の六月亡くなった私の父のために、仏壇のリンを買いました。このたび、松林の訃報を聞いたのが、札幌に帰った夜中でした。仏壇でそのリンを鳴らすと涙がとまりませんでした。

松林は、私が弁護士活動二年目で政治の世界に踏み込むことになった時、「俺も政治の仕事はやりたかったが、お前がいるからお前に任す。俺は応援側にまわるからしっかりやれ」と励ましてくれました。以後ずっとその言葉のとおり三十五年間、私の東京後援会の事務局長として、当時の後援会会長、故竹田巖道さん、今の阿部武彦さんと一緒にがんばってくれました。特に三回にわたる知事選挙では、仕事をなげうって札幌まで何度もスミ子夫人共々かけつけてくれました。

私には、松林君ともう一人中学時代からの生涯の友といえる池田君がいますが、これまで政治活動でいろいろなことがあり困難にもたびたびぶつかり辛いこともありましたが、そのたびに、三人で、飯を一緒に食べたりゴルフや麻雀に誘ってくれて励ましてくれたこと、どんなに私自身が慰められ、力を貰って活動を続けてこれたことが、感謝の言葉もみつからない程です。

この十一年にわたるガンとの闘い、壮烈な闘いの中でよくもあれだけ頑張れたなあ、そして人への優しさ思いやりをみせてこられたなあ、驚きと尊敬の念でいっぱいです。そして、そのいい時も悪い時もかたわらにあって、スミ子夫人がどんなに気苦労されてきたことか、松林の苦しみと子供のような部分を、奥さまが広い愛情で受けとめてくれなければ、十一年もの間、病氣と闘うことはできなかったと思います。

松林君、そしてスミ子夫人、本当に本当にありがとう。松林のかけてくれた大きな期待と希望、その思いを忘れることなく、私は、私達は、これからも歩んでいかなければと心に誓っています。

葬儀委員長の挨拶としては、個人的感情にすぎたものとなり、誠に申し訳ございません。

御遺族にとりまして、そして、私を含め本日お参り下さった皆さまにとりまして、大きな大きな存在であった松林詔八君の御偉徳をしのび、心よりこれまでの深い御厚情に感謝申し上げ、御冥福をお祈りいたします。

本日は、御多用のところ、又、暑さ厳しき折、お参りいただき誠にありがとうございました。